

本因坊が直きくにして、盤面を見ることは内弟子すら、先生の居ない間に窺つとみることすら出来ない程であつた。されば十四世本因坊秀和先生の代に、隣家から火事が出て丸焼けとなつたが、浮木の盤だけは眞先に持出され些かも損するところはなかつた。

秀榮先生は其十四世の次男で、十五世が秀悦、十六世が秀元、十七世が秀榮、十八世が秀甫、十九世が再び先生、と秀甫の他は秀和の子息だ。

秀甫は秀和の門人で本名を村瀬彌吉と稱へ、浮木の盤異變も長い碁界の紛擾も村瀬先生に絡むのである。

秀和は秀甫に向つて、お前を早く十五世にしたいが、知つての通り子供が多く、譲つては暮しが立たない。と云ふ先生の事情は納得したが、先生歿後の三人兄弟本因坊連続が氣に入らない。そこで方圓社を創立する。秀甫は第一人者だから馳せ参する者が多い、本因坊の方は影が薄くなる、斯くては碁界の紛擾となるおそれがある。

それは國技の上から見てよくないと仲裁に這入つたのが、後藤象次郎伯で、解決策を仰せつかつたのが澁澤榮一、犬養毅、朝吹英一、の諸氏や其他で、十八世本因坊は秀甫、即ち一番強いからだ。そして爾後は強い者が本因坊と方圓社長を兼ねることと決つて秀榮先生は浮木の盤を秀甫に

渡した。秀甫は當時五段の秀榮を一足飛ばして七段にする。

それと同時に秀甫も八段に昇進した。一番強い者が……といふ和解に勵まされてか、半年も経たない内に秀甫は「名人」と發表直前に惜くも歿した。そこで浮木の盤は、十九世本因坊秀榮先生の手に入つたのである。

ところで秀榮先生の風格だが、自分の段位に不服の人は何時でもお相手する、といふやうな事を云つた。又相手にそんな手を打つて、よく碁飯を「微笑つて」食へますネ、へ、へ、と五段位な者に鋭い眼をし云つたものである。所謂、良薬は口に苦しで人が寄りつかない。先生の嫌ひなことは（此碁は頭が痛かつた、熱があつたなど）と敗けた言譯をする人であつた。其當時六段の某もよく云つたものだと言つて相手を冷笑した。

入門をする者に付添ふ親が「碁でも覺へさせやうと連れて参りました」と云ふ「でも」に澁い顔をしてゐた。又、稽古先だとか、お屋敷とか、お出入先とか、これにウンザリすると云つてゐた。

某候爵などには、先生「ワザ受けは嫌ひ」殿様あつかひは迷惑千萬、と初対面の時に言つて、みんな敗かされ甚だ不機嫌、で二度と行かない。が矢の様な使ひで行くと、先づ三大夫が待構へ

てゐて、先生宜敷願ふ、御前の不機嫌「家中が困る」と頼むが、そんな事にお構ひなく初めて「同様」これは藝道に上下の差別をしない、道に對する良心からである。その氣位で教へを頼みに来る人も無く、稀れにある禮儀を知る垢抜けのした人ばかりだから年中貧乏だ。が堪へて先哲の碁經に親んでゐた。この淡々たる清風孤獨を知る一人が、朝鮮から吾國へ亡命中の、日本名を岩田周作と云つた金玉均氏で、「秀策先生は吾師也」と氏の額が先生の宅にあつたのを見て、よほどの親しい仲と思つてゐた。浮木の盤は氏の宅にあつたのが、異變の原因である。

先生が金氏へ預けたのは、貧乏生活の自宅に置くのが不安からであらう。處で金氏は國事の爲に上海行となつた。その際、家具全部を抵當にして旅費を調達した。浮木の盤はその中に入つてゐたのである。

家具を抵當に金氏に旅費を貸した人が松岡市三郎氏、氏は家計不如意となつて賣らうと某へ話す、某は千金で買ふが、それには秀榮の證明が必要といふ、そこで氏は秀榮先生の宅へ行き、禮金二百圓出すから證明してくれといふ、先生は嫌だといふ、その盤は本因坊にあつて家寶だ、他にあつて三兩位な物、千兩でも證明を賣物にしたくはない、といふ高潔心であつた。

松岡氏は困つて土田政次郎氏へ七十金で謂はゞ質入れをした。土田氏はに出したいと秀榮先生を招き、先生は碁に篤志の仁とのみ思つて行くと、これに計略があつて、即ち盤を先生の來る前に出しておき、そして先生の様子を遠見してゐた。先生はこんな事に敵らない知らぬ顔の半兵衛で、仕方なく氏はお稽古願ふと六子おいて、これを濟ませて、妙な木で何木かを訊いたものであらう。

これにも先生は癪にさはつて、二局目を打とうと石を置き始めた時、二度とは教へぬといつて辭去する、これに氏は後悔したが、そこで拙者を招いて此事を話し、何とかよい分別はないかと頼むだ。が本心を確めておく必要がある、これが浮木の盤と決つたら何うする、と拙者の問ひに長年紛失の家寶が貴下の爲に出て有難い、と秀榮先生の一筆で満足すると云つた。

と拙者が紳士の構へをしてゐる答へであつた。拙者は先生宅に行き其意を傳へた。が、お前は若いから箴るよ、其意が本心なら始めから俺の所へ來る筈、箴手を考へる奴に紳士は無い、と斷はられた。

が拙者は押強く、土田氏には返事もしませんが、碁界唯一の寶が無くなり後の者が困りますから、何か特徴をお話くださいと頼んだ。其時の私の頼みかたが眞剣であつたためか、先生は私に話

してくれた。

話は少し脇道にそれるが、私が夫から七八年後、滿洲安東縣に一寸滞在した時、やまと新聞の記者で大山格司といふ人が来て、君は本因坊門下だから訊くが、浮木の盤は坊家に有るか、俺は金玉均の同士で、秀榮が預けに來た節も坐に在つた。

又金氏の旅費調達の爲、松岡市三郎紹介したのも俺、後で浮木を秀榮に返せばよかつたと、氣がついたが俺も國事に追はれて其態になつた、と裏書き同様な一事を語つた。

それから二十年後の昭和十年と思ふが、京橋の高島屋に名寶展があつて觀に行き、其中に「織田信長より本因坊算砂に傳はる」と立札に書かれて、出品者は保坂潤治氏とあつた。

が盤の全部がよく見られぬので、保坂氏へ手紙を出した。氏は自動車を飛ばして拙宅へ來た。そこで先づ保坂氏の手許へ入つた次第を伺ふことが出來た。

保坂氏は答へて土田氏から、其前の「所藏者は松岡氏との事」でお見せ下さるかと言へば、どうぞ、幸ひ車が待たせてあり、同車とのことで、氏の宅へ行つて見た。

そして碁盤を前にして、黙想十分餘「……」これは、本物だ、本因坊秀哉に譲つて下されと頼むより、浮木の盤を見せられる前に天下一品物數點を見せられ、それ等を多く所藏する保坂氏の

所なら、萬年保存も可能であると思つて、靜かに家に歸つた。

その翌日、再び保坂氏は拙宅へ來た。そして氏は、浮木の盤の事に何か書いてくれと頼まれたので其處で「保坂氏天下之名寶浮木盤所藏」と書いた。

明治維新より大正末期迄の基督教の消息

維新、即ち明治と年が改まつて、家元四家や、其四家の各門下七段以上の有祿者が、無祿となつた。

それは三條實美、西郷隆盛、木戸孝允、といふ維新の元勳が碁所に來て、手合や其他の儀式を見せて貰ひ度いと言つて來たので碁所では徳川幕府の從來通りを見せた。

それに對して西郷公は「一先づ碁所を廢す」其内「何んとか沙汰をする」と言つた。之で無祿となつた次第である。

家元でさへ「圍碁稽古所」と云ふ小看板を出して生活を維持してゐる。三段などの生活難は極度であつた。

明治八年となつて、福井縣福井で、第十五世本因坊秀悅六段、安井算英五段、中川龜三郎五段や其他高段者が五名出席した大碁會があつて、碁道は小都會から大都會へと復興して行つた。

秀悦六段は十四世本因坊秀和八段の實子で、秀和先生明治四年に歿して十五世を襲名した。西郷公が顧問であつたなれば「何とか沙汰をする」が早く實現したであらう。然し西南戦争で惜くも公が歿した。

その様な事情で方圓社創立は明治十三年となつた。創立の後援者は伊藤博文公（當時伯爵）や其他の名士百三名であつた。

維持費は三萬金集まつた。社長は村瀬秀甫七段である。副社長は中川龜三郎六段である。徳川氏當時の各家元は顧問である。機關雜誌は圍棋新報で編輯者は文學博士久米邦武氏がやつてゐた。

後に編輯者は文學士三好紀徳氏に變つたが、氏も當時の圍棋新報に記事を載せてゐる。殊に氏は秀甫先生推舉の三段であつて「文棋一體」といつた名文であつた。

斯如き堂々たる顔ぶれで方圓社は創立され、維新以後一時衰退の兆をみせた碁道は急速に復活され目覺ましい發達をした。

従つて社長の村瀬秀甫七段は八段に昇進し、副社長の中川龜三郎六段も七段に昇進した。社員の小林鐵次郎五段も六段に昇進した。其他にも多い昇進者があつた。

處で内紛から退社の騒ぎが起つた。當時の家元は、本因坊十六世秀悦六段は歿して、十六世は秀元四段、林は秀榮五段、安井は算英五段、井上は大阪へ轉居、で井上以外の三家元が方圓社を連袂退社をした。

内紛の原は、家元でも方圓社の免狀を受けべきが原則、と社長の村瀬八段と副社長の中川龜三郎七段が主張したことに始まる。

それに對して家元は家元として「各免狀を出す從來通り」と主張して相方共譲らなかつた。分裂に伊藤博文伯と後藤象二郎伯とが仲裁に這入つた。が裏に裏があつて、二伯は仲裁に手を焼いたのである。

それは方圓社長村瀬秀甫先生が、本因坊に對して大いに不満があつた。

即ち先生は十四世本因坊秀和八段の門人で門下の最强者だ。されば次代の本因坊は自分と思つてゐた。處が秀和先生より「お前に早く譲るのだが」小供が多く「何とか都合のつくまで」待つてくれ。と云はれて秀甫先生は了承した。

然るに秀和先生歿して、先生の長子秀悦六段が十五世本因坊となつた。又十六世も先生の三男秀元四段が名乗つた。

自分よりはるかに弱いものが、次から次と本因坊を「独占」したので秀甫先生は大變不愉快であつた。其處へ本因坊より挑戦があつたので、流石の有力二伯の仲裁も手の施しようがなかつた。

即ち十六世本因坊秀元四段では秀甫八段に「對抗不可能」で林家元より秀榮五段が轉出して、第十七世本因坊秀榮と成つた、之を秀甫に對する挑戦と云ふ次第である。

秀榮五段は秀和先生の二男で、林家元へ養子に行つた。當時秀甫に對抗できる人は、五段でも強い「七段位」と云はれた秀榮先生より外に無いのであつた。

秀甫先生は愈よ本腰に怒つた。兄弟三人とも「本因坊」か、よし打倒しやうと決心した。

秀の字が澤山出てゐるが、まだ其外に井上秀徵六段や、安田秀策七段や、今より十年前に歿した田村秀哉名人があつて、云はゞ總本山十四世本因坊秀和先生の「秀」を頂いた秀逸の至藝に因るものである。

さて秀甫先生と秀榮先生の對立は激烈であつたが藝や人物が秀榮先生より秀甫が上で、方圓社の益々隆盛に引替え、本因坊の蔭は薄かつた。秀榮先生は下宿屋住ひをしてゐた。

秀榮先生には、犬養木堂、頭山立雲、金玉均、といふ國士が後援し、秀甫先生には堂々たる舊

### 大名や紳商が後援してゐた。

其後援の物質厚薄に關はらず、兩先生は鍊磨研究に没頭してゐた。

即ち當時は「安田秀策七段必勝不敗之布石」が流行してゐて、秀甫先生は、秀榮も秀策流だから、秀策流打破の研究に力を盡してゐた。

夫を秀榮先生は察して、秀甫打破の研究に力めた。食ふや食はずの精進であつた。

處で最ういゝ時機と許り、後藤象二郎伯や、澁澤榮一子や、犬養木堂先生や、其他三名が兩先生和解に乗出した。

和解は成立した。時の最強者が「本因坊で方圓社長兼任」と決定した和解條件である。

そして秀甫が秀榮に五段より一躍七段の免狀を授與して第十八世本因坊方圓社長が出来た。

即ち村瀬秀甫八段其人である。

秀甫先生は其後間もなく名人昇進に内定であつた。が發表を見ずに惜くも病死した。

其處で當然、即ち秀榮七段が第十九世本因坊兼方圓社長と成るべきであつた。

が方圓副社長の中川龜三郎七段と、同社理事の小林鐵次郎六段が、本因坊襲名は「御勝手」但し方圓社長は村瀬と「個人決定」方圓社長は中川龜三郎に決定してゐる。と秀榮先生に通告し

た。

明治十九年であつた、秀榮先生は仕方なく、第十九世本因坊襲名だけの披露會を兩國の中村樓で開催した。

その披露會開催は本因坊襲名と同時に八段昇進發表であつた。披露の扇面には三舟と云はれた勝海舟、山岡鐵舟、高橋泥舟、の泥舟先生撰文と書筆であつた。

又方圓社と本因坊の不和が生じたが、方圓社全社員が其披露會に心よく出席した。感情は感情として、職域義務は義務と果した。斯くあるべき碁道向上の、協力共榮であつた。

されば秀榮先生宅の四象會にも、方圓社員は出席して先生の教へを受た。

四象會は秀榮先生唯一の後援者、高田慎藏氏の夫人まき子さんの寄進で、出來たものである。

四象會名は犬養木堂先生がつけた。秀榮先生と、安井算英七段と、石井千治六段と、廣瀬平治郎五段の「四匠師匠」と通じる、即ち四象會の由來と木堂先生が私に語つた。

この會は後に十匠と増員して、九匠が彌が上にも上達した。碁道の進歩發達に益した秀榮先生の實に賜ものである。

方圓社長中川龜三郎先生は、溫厚篤實な性格の持主であつた。従つて人望があり社運は順調に

碁道は愈よ流行した。碁經出版店や碁盤店も新聞様々であつた。

本因坊秀榮名人歿して、第二十世本因坊は土屋秀元四段、即ち秀榮先生の實弟であつた。秀元先生は實力六段あつたが、人が何んと云つても四段より昇進せぬ、兄秀榮先生に劣らない仙骨であつた。

方圓社は、社長巖崎先生が八段昇進と同時に引退して、後任は石井千治七段が中川龜三郎先生の養子になつた二代目中川龜三郎先生であつた。が方圓社は次第に振はなくなり、教場も轉々低下して悲境に落ちて行つた。

一方本因坊秀之四段は引退して、田村保壽八段に譲つた。之が後に名人に昇進した第二十一世本因坊秀哉であつた。此人も振はぬ、何事も引込み思案の人であつた。

そこで裨益會が現はれたり、中央棋院が現はれたりして、碁界の新興運動が起りはじめたが、一年と經たぬ間に東京大震災の爲に全壊同様となつた。其處で碁界も復興を要する運動が起つて夫が成つた。所謂、吳越同舟の日本棋院である。

されば吳越は碁越に通じる即ち碁を越境した私情の衝突があつたりしたので錚々たる五人が日本棋院を去つて、棋正社を創立した。大正十三年の碁界の異變であつた。



進んでゐた。

面白いことに先生の碁風は、性格の反對を行く。五段どころでも下手をすると、先生の雷撃を食つて、木葉微塵に打碎かれる百目大敗であつた。

それで先生は稽古が荒いと云つて、勝ちたがる所謂、殿様連中は寄付かない。寄付く者は荒い稽古を希ふ人達であつた。

その頃は日露戦争中だが、吾國大勝の御蔭で碁は益々流行であつた。

戦争が終つて、秀榮先生は名人に登つた。披露會は頭山滿先生の後援であつた。方圓社長は中川先生引退して、後任は巖崎健造七段であつた。

この頃に讀賣新聞社が碁を初めて紙面に掲載した。殊に思付きが面白い。東京と大阪との電報碁だ。對局者は方圓社長巖崎健造七段と、大阪方圓分社長泉秀節五段とであつた。

それから碁を掲載し出した、時事や朝日や日日やの東京新聞社と、大阪や地方の新聞社であつた。

即ち讀賣が電報碁で八千部増刊、當時の八千部數は今日の十萬部に相當、従つて讀賣以外の新聞は讀者減少であつて、千部はさておき、五百と減少しても大變の止むを得ぬ防禦戦であらうが

斯くて兩者とも夫れ夫れ藝道に精進して、受段者も逐次増加してゐる。大阪の碁況は、井上因碩七段の門下が別に昭和棋院を創立した。

以上が大體明治から大正の終にかけての碁道史荒削りの記録である。

碁道史談錄

著者略歴 明治十三年十八歳にて碁道入門  
大正十年より數年間讀賣、報知、國民、都  
新聞等の碁の欄擔當雁金八段と棋正社を創  
立す。現在棋正社八段  
主なる著書大衆圍碁講座、其他圍碁關係書  
數冊

日本出版會承認番號い 120879  
發行部數 2000部

昭和十九年三月十五日印刷 昭和十九年三月二十日發行	著者	發行所
高部道平	東京都芝區田村町三ノ四 南樓ビル	創藝社
久保田康榮	印刷者	電話芝一五〇四八二 振替東京一九〇四八二 會員番號一五〇三七
塚田印刷所	製本所	
東京都芝區田村町四ノ二〇	和製本所	
東京都京橋區西八丁堀二ノ一〇	配給元	
日本出版配給株式會社		
東京都神田區淡路町二ノ九		

定價 三圓五十錢  
特別行爲稅 拾五錢  
相當額 參圓六拾五錢

(東東 1078)



終

賣價税込 參圓六拾五錢